

観光フォーラム

オーストリア紀行

— ツーリズム・ポイントを中心に —

Travelogue on Austria:
Attractive tourism destinations

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

I. はじめに

オーストリアは、ドイツ語が国語であるドイツ語圏の国で、国の呼び名も正しくはドイツ語で Österreich (オェスターライヒ:直訳的には「東の国」ただし現在の正式国名は“Republik Österreich”(オェスターライヒ共和国))という。本稿は、筆者が同国の主要地域について見聞したところを中心に、ツーリズム上の若干の特徴点を提示し、大方の参考に供するものである。

オーストリアの有史の歴史は、古代ローマ帝国時代にウィーン等がローマ軍の駐屯地として使用されたことに始まる。その後、14世紀から18世紀にかけてペストがいく度か起きたばかりか(本稿で後述のようにウィーン市内に現在ペスト犠牲者追悼碑がある)、1830～31年にはコレラが大流行し、ウィーンなどでは一時飲み水が全くなかったといわれる。

政治的には同国は、ローマ帝国の東西分裂後(395年)、神聖ローマ帝国に属した時期があり、すでに11世紀ごろにはこの地は“Osterrichi”(Österreichの原形)と呼ばれていたといわれる。その後種々な経緯があったが、結局、1438年以降にはなんらかの形でハプスブルク王朝の本拠地として、その世襲的統治のもとにあった。同王朝は、1789年のフランス革命の際断頭台で露と消えたマリー・アントワネットの実家である。この点でも忘れられない所であるが、この革命の際、マリー・アントワネットらフランス国王一家は、ウィーンを目指して馬車でパリを脱出、途中で革命軍側に拘束されたといわれる。

ちなみに同国は、その後、第一次世界大戦の敗戦(1918年11月11日)にともない1918年11月12日に共和制に移行し、同王朝による帝政は、終りを告げた。

II. ウィーン概観

1. ウィーンの2つの特性

オーストリアの最も代表的な都市は、なんといっても首都、ウィーンである。ウィーンは、本稿筆者のみるところ、大別して、2つの特性(2つの顔)がある。いうまでもなく、その1つ

は、前記のハプスブルク王朝の本拠があった“王宮の都”という特性である。今1つは、モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、ヨハン・シュトラウスなど著名な音楽家が活躍した“音楽の都”という特性である。この2つの特性が現代でも色濃く残っているところに、ウィーンの何よりも特徴がある。

ところでウィーンは、市内交通的には、市内電車、各種バス、地下鉄があり、地図をもって市内観光するのにかなり好都合な所である。さらに市街地理的には、王宮を中心にした中核的部分が都市中心部に集中しているが、その地域(Innere Stadt)は、「リンク通り」(Ringstrasse:通称「リンク」:リンク通りの総延長は約4km。ただしリンク通り内部の地域全体を総称して「リンク」という場合もある)とよばれる環状道路内にあるものになっている。リンク通りには市電が(環状線的に)走っていて、リンクの境界がはっきりしている。

このリンク通りは、もともとはウィーンの城壁のあった所で、18世紀半ばの頃、時の皇帝、フランツ・ヨーゼフ(Franz Joseph)の命により取り壊しが始まり、その後「リンク通り」として完成したものである。これは、現在、いわば旧市街と新市街との分離帯となっている。例えばリンク内には、市電は入らない。道路は、歩行者天国のようにになっている(リンク内の広さは直径約1km)。

従って、以下においてリンク内の賑やかな中心的な通りを“繁華街”とよんでいるが、例えば日本でいえば、(東京の銀座通りではなくて)大阪、心斎橋筋のような、人道のみの通りをいうものである。

2. “王宮の都”ウィーン

このリンク内でシンボリックにも中心にあるものの1つが、王宮(Hofburg)である。何よりもその前庭の広さや雰囲気は、日本・東京の皇居前広場を彷彿させる。ただし、日本の場合と異なって、堀などはない。王宮の建物も、広場に面していない所では、道路1本で商店や民家と接している。

王宮の建物内部は、規定に従って見学できる。大学関係者にとって興味深いことは、王宮内に旧王室図書館があり、見学できることである。それは、現在ではオーストリア国立図書館になっているが、もともとは王室図書館であり、実に豪華なものである。この図書館は王宮建物内にあるが、見学者入口は、王宮見学の場合とは別になっている。

一般的に広く注目されるものに、王宮とはリンク通りを隔てて建っている自然史博物館 (Naturhistorisches Museum) と美術史美術館 (Kunsthistorisches Museum) がある。両館の間の広場 (庭園) には、有名なマリア・テレジアの大きな像があり、ここはマリア・テレジア広場といわれる。美術史美術館は、いわゆる“ウィーンの美術館”として世界的に名高いもので、所蔵画には有名なものがいくつもある。

王宮関連施設としては、さらに、ウィーン中心部より (リンク外) 西方にあるシェーンブルン (Schönbrunn) 宮殿が何よりも注目される。年間約 150 万人の見学者があるといわれる人気の高いものである。ここは、もともと王室の夏季用別宅として作られたもので、モーツァルトが 6 歳の時この宮殿でピアノ演奏したことで知られている。その美しい、かなり大きな宮殿建物は、中に 1441 室もあるが、ウィーンの住宅不足の際には、上層階の一部が賃貸住宅として貸し出されたことがある。

同宮殿の庭園も実に立派で、広くて大きい。これは 1698 年と 1740 年との 2 度にわたる工事で完成されたものであるが、庭園だけで東西約 1.2km、南北約 1km もある。奥に向かって少しずつ高くなっている、丘のような作りになっている。見学の際には丘の上にある回廊的建築物、グロリエッテまで是非行ってほしいものである。このグロリエッテは 1775 年にできたもので、(横の) 全長は、両脇の階段状のものまで入れると 135.3m ある。

また、この宮殿とは別に、ウィーン市内南方向にはベルヴェデーレ (Belvedere) 宮殿とシュバルツェンベルク (Schwarzenberg) 宮殿がある。ただしベルヴェデーレ宮殿は、現在は主として美術館になっている。また、シュバルツェンベルク宮殿はもともとシュバルツェンベルク侯爵家のものである。さらに、ウィーン少年合唱団、少女合唱団の本拠地として有名なアウガルテン (Augarten) 宮殿がある。ここは近くに陶磁器生産工房 (製品のトレードマークが Augarten) のあることでも知られている。さらに、ウィーン市街南方にはラクセンブルグ (Laxenburg) 宮殿 (地域) がある。

リンク内の王宮に戻ると、同王宮の (ミハエル広場 (Michaerplatz) に面した) 正門から真正面に北東方向に出ている繁華街の通りをコールマルクト (Kohlmarkt) 通りというが、この通りには、王室ご用達として名高いケーキ・喫茶店、デメル (Demel) などが店を連ねている。この通りをそのまま真っ直ぐ少し行って、直角的に南東方向に曲がると、繁華街グラーベン (Graben) 通りがある。

その通りの中心部に“ペスト犠牲者追悼碑” (Pestsäule) があり、さらに少し行くと、ウィーンの今 1 つのシンボリック建物、

聖シュテファン大寺院 (St. Stephan Dom) がある (王宮正門から徒歩約 500m)。この大寺院の屋根は黄色部分が強く目立つもので、遠くからでもよくわかる。1階本堂の地下がカタコンベになっていることでも知られている (この点について詳しくは大橋, 2017 も見られた)。一方、同大寺院本堂横の高い尖塔には、エレベーターがあり、利用できる。

この寺院の前の広場で交差する今 1 つの人通りの多い繁華街は、ケルトナー (Kärntner) 通りというが、その通りを南方向に少し行って、西側 (ケルトナー通りの向かって右側) の路地を入ると、1本西の通常の比較的静かな通り、ノイアー・マルクト (Neuer Markt) 通りに行ける。

この通りに面して、外観は余り目立たない、カプティナー教会 (Kapzinerkirche) がある。この教会は、実は、地下がハプスブルク家の代々の納骨堂 (Kaisergruft) になっているもので、1633 年 以来の皇帝の霊柩、すなわち棺などが置かれ、公開されている。マリア・テレジアのそれもある。それは別格的に大きく、立派なものである。

ここは、確かにかなり大規模な納骨堂であり、何よりも荘厳さを感じる。しかし同時に、この教会が、西欧で覇を唱えたハプスブルク家の王室納骨堂にしては、比較的質素な感がするものであり、かつ、(遺体を納めている) 霊柩などがこのように、手で触れることができるような形で、広く公開されていることには、何か表現の難しい複雑な感慨を覚える。と同時に、他方では、こうしたものを拝観すると、“王宮の都 ウィーン”という感がさらに強くなる。

この教会を出て、この教会の前の通りをさらに南方向に 300m ほど行くと、リンク通りに面して建つ国立オペラ劇場 (Staatsoper: オペラ座ともいう) がある。ウィーンの今 1 つの顔、“音楽の都”を代表するものである。

3. “音楽の都”ウィーン：ニュー・イヤール・コンサートなどについて

国立オペラ劇場は、夏季は原則休演であるが、休演時でも劇場内の見学ができる。欧米の代表的なオペラ劇場の雰囲気を感じることができる。また、こうした休演中も、劇場内売店は開いており、同劇場ゆかりの品が販売されている。

国立オペラ劇場から東南方向、300m ほどの所に有名な楽友協会 (Musikverein) ホールがある。ここは、外観上は特段の特色がないが、内部の反響の良さは当代随一といわれる。ここの大ホールでは、何よりも毎年 1 月 1 日昼過ぎからニュー・イヤール・コンサートが行われ、日本でも、同日、すなわち 1 月 1 日夕方、NHK・Eテレ番組で実況放映されることでよく知られている (ウィーンのコンサートと全くの同時放映であるが、時差の都合で、日本では夕方になる。ただしNHK・Eテレ番組における実況放映の画面では、多くの場合、ウィーン収録機関が事前に撮影した、ウィーンの著名宮殿などをバックとした、一流パレリーナによるパレリーナなどが挿入されている。ただし音楽放送は、それと関係なく、コンサートの実況放送のまま)。

このコンサートは、実力世界一といわれるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が演奏し、指揮は世界の代表的な指揮者が招かれて行うことになっている。日本人でもかつて小澤征爾氏が指揮棒をとったことで有名である。

その時の放映画面では、聴衆席にかなり多くの日本人が見えた。その中でも聴衆日本婦人の実に多くが（テレビ画面で見ると）和式の着物姿であったことを、今でも鮮明に記憶している。本稿筆者がウィーンを訪れた時にも、王宮や聖シュテファン大寺院付近を歩いている着物姿の日本婦人をいく人か見かけたことがある。それが、ウィーンでは、さも京都の街のように、しつくりと街になじんで見えた。ウィーンとはそうした所である。

ニュー・イヤーズ・コンサートに戻ると、これはウィーンでは、あくまでも1月1日、すなわち元旦の昼過ぎ午後に行われるものであることを承知しておいてほしい。というのは、1月1日すなわち正月の意味が、日本と、オーストリアはじめ欧米キリスト教文化の国とでは、根本的に異なるところがあるからである。換言すると、1月1日の正月の意味と、12月25日のクリスマスの意味が、日本とキリスト教文化国とでは、ちょうど逆になっている。

日本では、元旦は一般に年の初めとして仕事も休んで厳粛に迎え、お宮参りをしたり、お年玉をあげ、改めて挨拶をし合うなどをするときである。その前夜、大晦日の夜も仕事取めをし、家族揃って年越しの蕎麦を食べ、新年を迎える前の夜として比較的厳粛に過ごす。早くもお宮参りに行くものもある。

ところが、キリスト教文化国では、このように静かに厳粛に過ごし、プレゼント交換などをするのは、(キリストを讃える) クリスマスの日であって、反対に元旦は、新しい年を大いに陽気に迎えるものである。前日の12月31日夜から(自宅や行きつけの酒場などで) 盛んにはしゃぎつつ、年の変わり目の瞬間をみんなで大声でカウントダウンする。そしてその瞬間、所によっては花火が打ち上げられ、ヘリコプターが曳光弾を発しつつ飛び回る。日本的に言えば、陽気な忘年会が街中で1月1日の朝まで繰り広げられるといったものである。

1月1日昼過ぎから開かれるウィーンのニュー・イヤーズ・コンサートは、まさにこうした雰囲気の中で開催されるものである。それ故例えば、会場の大ホールは、もともと金色の色調豊かな金爛的なものである上に、このコンサート時にはステージや壁面に花が一杯飾られて、実に華やかな雰囲気のものとなっている。もっとも、このコンサートの人気はとて高く、(テレビ画面で見るところ)ステージ上の楽団員の座席は隙間なく詰め込み、ステージの横や楽団員の背後の隙間まで聴衆席がある、というものである。

演奏されるものもヨハン・シュトラウスの曲に代表されるワルツで、人々は演奏を聴きつつ、ワルツを楽しんでいる。指揮者も、楽団員全員とともに、聴衆に向かって、異例にも、コンサート中に(ドイツ語で)「新年おめでとうございます」と声をかける。そしてアンコールでは必ず、「美しく青きドナウ」が演奏され、そして最後に「ラデッキー行進曲」が演奏される。この時には、

聴衆全員が指揮者の指揮のもとに手拍子の大合奏をする。このようなことも異例といえは異例であるが、定番的に決まっている。これでコンサートは終わり、ウィーンに新年が来る。これがウィーンの正月である。

ちなみにこの曲の主題者、ラデッキーは、正式には“Johann Josef Wenzel Graf Radetzky von Radetz”といい、オーストリアで人気の高い伯爵、陸軍元帥であった人で、リンク通り沿いにある旧陸軍省建物の前に、騎馬にまたがった銅像がある。そのほか、近くに、「ラデッキー通り」(Radetzkystrasse)、「ラデッキー広場」(Radetzkyplatz)、「ラデッキー橋」(Radetzkybrücke)がある。

なお、本年すなわち2023年1月1日のこのコンサートのNHK放映画面では、アンコール曲の「美しく青きドナウ」の放映場面において、事前に収録された(本稿後述の)“メルク修道院”(Stift Melk)の内部をバックにしたバレエ画面が放映された(アンコール曲についてこのようなことは、ある意味で当然ながら、これまでには原則として無かった)。ここには、プログラム上ではアンコール曲とされている「美しく青きドナウ」と「ラデッキー行進曲」について(必ず演奏されるものであるが故に、事前にこうした準備がなされることがあるという)特別な位置づけ、および、ドナウ川に関連しては同修道院の格別の地位を充分に読み取ることができる。

4. ウィーン各地：“ベートーベンの小径”など

リンク通りに戻って、それに沿って歩くと、モーツァルト、ベートーベン、ヨハン・シュトラウスなどの像があるし、ヨハン・シュトラウスの住んだ家などもあって、まさに“音楽の都”であることを改めて実感させられる。ヨハン・シュトラウスの家は、案外質素なものであることに驚かされる。リンク外の市電に乗り継いで中央墓地(Wiener Zentralfriedhof)に行くと、ベートーベンやシューベルトなどの墓地がある。

コンサート等のいわゆる音楽会についても、ウィーン全体では、真夏の時期を含め、各種のものが多く開かれている。比較的大規模なオーケストラによるものがある一方、室内楽音楽会や独唱会などがある。中には楽友協会ホールで開催のものもある。夏季でも「音楽の都」を十分に堪能できる。こうした催し物の案内ちらしなどは、多くの場合、ホテル・フロントにおいてあり、入場申し込み・チケット入手は、ホテル・フロントですることができる。ただし、こうした音楽会は、夕方に開会し、帰途は深夜になることが多い。この点も充分に考慮しておくことが肝要である。

「音楽の都」として、さらに忘れることのできない場所に、ウィーンの北方、ハイリゲンシュタット(Heiligenstadt)地域にある“ベートーベンの小径”(Beethovenengang: ベートーベンの散歩道)を中心としたベートーベンゆかりの一角がある。ここへ行くには、ウィーン市電のハイリゲンシュタット方面行きで終点のヌスドルフ(Nussdorf)まで乗り、同停留所前にある大きなペー

トーベン関連施設案内板に従って進めばいい。さらに途中には「Beethovengang」という案内標識が随所に掲げられているから、迷うことはない。

この“ベートーベンの小径”は、ベートーベンがなかならず「田園交響曲」の作曲の際、散策に歩いた道といわれ、途中には「田園交響曲」作曲のために使った実際の家や、生活上で借りていた家（Beethovenhaus）の跡や、散策の途中でいつも休んだという所（Beethovenruhe：記念碑が建っている）などがある。

ハイリゲンシュタットは以上とし、リンク通りに戻ると、その西方線域に国会議事堂（Parlament）と、市庁舎・市庁舎公園（Rathauspark）に並んで、ウィーン大学（Universität Wienただしここは、現在は同大学ウィーン本部キャンパスになっている）がある。これは1365年、神聖ローマ帝国時代にハイデルベルク大学などとともに設立されたドイツ語圏最古の大学の1つである。その構内の別館（主として食堂等サービス部門のあるもの）の玄関正面、2階に上がる階段の正面壁面に「DIE WISSENSCHAFT UND IHRE LEHRE IST FREI」（学問・教育は自由）と大書して刻印されている。WISSENSCHAFTとLEHREが合体して単数で表わされていることを含め、実に印象深い。

ウィーン大学前のリンク通りを南方面に約1.5km行くと、カールスプラッツ（Karlsplatz）という地点があり、その近くにウィーン工科大学（Technische Universität Wien）がある。同大学は1815年設立の由緒あるものであるが、同大学本館の正面玄関ホールには、（学生を含む）同大学関係者のうち第一次および第二次世界大戦の犠牲者追悼慰霊碑（第一次世界大戦の場合には氏名も刻印）が建立されている。おのずと頭が下がる。

次に、その北方（ウィーン市内としてもリンク通りを越えた北方域）、ウィーン北（Nord）駅近くにあるプラター（Prater）公園について一言しておきたい。ここは、1873年のウィーン万国博覧会で中心的開催地になった所であるが、何よりも、ウィーンの大観覧車（Wiener Riesenrad）として知られている。この大観覧車は、1897年にできたもので、最高位置は高さ約65m。今日では特段に高いというものではないが、これは何よりも、第二次世界大戦直後のウィーンを題材にした、イギリスの著名なミステリー映画「第三の男」において、印象深い背景となったことで一躍知られるものになった。

ところで、この大観覧車の下あたりには、線路幅（ゲージ）が38.1cmというかなり狭軌な鉄道リプットバーン（Liliputbahn）の停留所がある。この鉄道は、同公園内をほぼ直線的に走行するものであるが、総延長は約4km。それを20分ほどで走行する。おもちゃ・ミニ鉄道の観があるものではあるが、実際上は、市内のこれだけ離れた2つの地点を結ぶ交通機関の役割を果たしており、通勤、通学や買い物などに利用している人が結構ある、堂々たる本格的な交通手段になっている。この公園の広さもさることながら、同鉄道もウィーンらしいと実感させられる。

ウィーン市内は以上とし、次に、いわゆる「ウィーンの森」

探索の一環として、ドナウ川遊覧の模様と、ウィーン郊外にあるヨーロッパ最大の地底湖、ゼーグローテ（Seegrotte）について、簡単に述べておきたい。

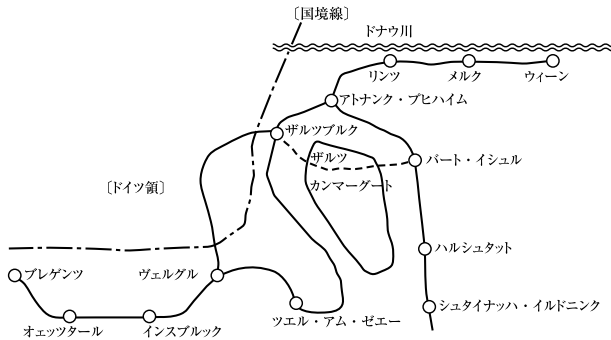
5. ウィーンの森各地：ドナウ川遊覧、ゼーグローテ

まず、ドナウ川遊覧（連絡）船では、ウィーンのライヒスブリュッケ（Reichsbrücke）棧橋から例えば（後述の）リンツ（Linz）まで往復するものなどもあるが、これらはかなり長時間航行するものである。ウィーン訪問客にとってドナウ川観光として実際上定番的なものは、（前述の）メルクの訪問を含んだところの、ヴァッハフ（Wachau）渓谷といわれる区間のみを航行するものである。

このヴァッハフ渓谷観光を主眼とするドナウ川遊覧（連絡）船に乗り、観光旅行をするには、ウィーンの側からすると、移動経路的には、定番的には次のようになる。まず市内のウィーン西（West）駅から列車でメルク（Melk）まで行き、そこでドナウ川遊覧（連絡）船に乗り換える。同船にはクレムズ（Krems）まで乗船し、クレムズの駅から列車で（ウィーン市内の）フランツ・ヨーゼフ（Franz Yosef）駅に帰るか、または、その逆の経路で行くかである。いずれにしろ、ドナウ川遊覧（連絡）船に乗船するのはメルク～クレムズ間のみであるが、同遊覧（連絡）船の航行時刻表等を見ても、この形のもの、すなわちメルク～クレムズ間のみ航行のもの、つまりヴァッハフ渓谷遊覧だけを予定した乗船の場合のものが多い。ちなみにヴァッハフ渓谷は、「ヴァッハフ渓谷の文化遺産」として世界遺産になっている。

この場合時間的（距離的）にみると、ウィーン西駅からメルク駅まで列車で約1時間。メルク駅から遊覧（連絡）船棧橋まで徒歩で約300m。メルクからクレムズまでの乗船時間は約1時間40分（逆にクレムズ→メルクは川に遡行するため約3時間）。クレムズで遊覧（連絡）船棧橋からクレムズ駅まで徒歩で約500m。クレムズ駅から（ウィーン市内の）フランツ・ヨーゼフ駅まで列車で約1時間である。

今1つのゼーグローテは、ウィーンの南西、約17kmにあるもので、もともとは石灰岩の地下採掘場があった所である。地下水が大量に溜まり、今では広さ約6,200㎡という大きな地底湖になっている。現在でもポンプで排水作業が行われている。この地底湖は、巨大な柱に支えられたいくつかの宮殿広間が接合したような姿になっており、そのいくつかの広間の間を、30人乗りぐらいのかなり大きな舟で遊覧（boat tour）できるようになっている。その大きさ、広さには改めてびっくりさせられる。地底湖に至る地下トンネル部分も広く、第二次世界大戦時にはドイツ軍の秘密兵器生産工場があったといわれる。ウィーン市内からは、ゼーグローテ遊覧を含む観光バスで行くか、ウィーン南（Süd）駅から列車でメイドリンク（Mädling）まで行き、そこでゼーグローテ行き路線バスに乗るかである。



オーストリア国略図

Ⅲ. オーストリア国の概観

オーストリアという国は、地形的にみると、南北に狭く東西に長い、比較的横に細長い国土のもので、ウィーンは、地理的には、オーストリア国全体からみるとかなり東方に位置する。オーストリア国の主たる部分は、ウィーンの西方にある。ちなみにザルツブルクやインスブルックなどの主要都市も、ウィーンの西部にある。

そこで、例えばオーストリア国内の基本幹線の鉄道路線をみると、ウィーン（西駅）を起点に西部方面に行く中心幹線が1本、オーストリア最西端の拠点である（ボーデン湖に近い）ブレゲンズ（Bregenzもしくはその先のリンダウ（Lindau:ドイツ領））まで走っている。

ところがこの路線の場合、ウィーン～ブレゲンズの中心幹線を全線貫通的に走行する主要列車（幹線的列車）は、全路線についてオーストリア領内を通るのではなく、一部がドイツ領を通るものになっている。すなわち、こうした列車は、ウィーン（西駅）を出た後、ドイツ国境に近いザルツブルクまではオーストリア領内を通るが、ザルツブルクを出た直後に一旦ドイツ領に入る。ドイツ領内をノンストップで通過した後、クーフシュタイン（Kufstein）近くでオーストリア領内に戻り、その後はオーストリア領内を西進し、ブレゲンズ方面に至るものとなっている。

ザルツブルクから（クーフシュタイン近くの）ヴェルグル（Wörgl）までは、オーストリア領内を通る別路線（非幹線的列車）があることにはある。しかしそれは、距離的時間的に、かなり遠回りになる。例えばザルツブルクからヴェルグルまで、ドイツ領内をノンストップで通過の場合、所要時間は約1時間であるが、オーストリア領内通過の路線の場合は（いくつかの都市での停車時間を含み）約3時間である。

ここでは、まず、ザルツブルクまでを取り上げる。この間には主要なツーリズム・ポイントとして、メルクとリンツがある。

Ⅳ. メルクとリンツ

メルクは、既述のように、ドナウ川遊覧（連絡）船の乗降場であるが、何よりも同棧橋横の丘の上に建つ、世界的に著名な（前記で一言した）メルク修道院で知られている。同修道院

は1089年創建（ただし現在の建物は18世紀に建築）で、そのバロック建築の偉容さ、美しさは、遊覧（連絡）船からはもとより、鉄道列車からも実に強く目を引く。メルク市内はもとより、近郊でも、どこからでも実に強烈に目立つものである。

こうした修道院は、後述の聖フローリアン修道院（Stift St. Florian）も同様であるが、修道士学校という意味のもので、建物もかなり大規模で、その姿、主要室内は何よりも絢爛豪華の一語に尽きる。メルク修道院の場合、なかんずく（前記のテレビ放映画面にはなかったが、見学できる）修道院内部の教会には圧倒される。前面の祭壇全体が金箔に覆われ、金爛豪華さには語る言葉がない。また、書庫には中世の手書き文書が数多く保管されているといわれる。

メルクからさらに列車で1時間ほど西方に行くと、リンツがある。ここも既述のように、ドナウ川沿岸の地で、寄港数は少ないが遊覧（連絡）船寄港地である。ドナウ川に橋が架かっている数少ない都市の1つで、何よりもオーバーオースターライヒ州の州都である（ちなみに、ドイツの旧ナチス党（正確にはNationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei：国家社会主義ドイツ労働者党）の党首、ヒトラー（Adolf Hitler）の生誕地はオーストリアのこの州である）。

市内にある現在州庁舎として使われている建物は、かなり由緒があるものである。もともとは1574年に開設された自然環境に関する州立高等教育機関（Landschaftsschule）があった所で、この学校には1612～1626年、有名な天文学者ケプラー（Johannes Kepler）が講義をしたことがあるといわれる。現在も中庭にはそれにちなんだ「惑星の泉」（Planetenbrunnen）という噴水がある。

一方、リンツ駅の北の方にはドナウ川が流れており、それに架かる橋を通る市内電車がリンツ駅から出ている。川向うの終点まで行くと、別のポェストリンクベルク（Pöstlingberg）行きの登山電車がある。それで標高537mの山を登ると、終点にはお伽話公園などがある。成人でも結構楽しめる本格的なものである。帰途には、せめて市電に乗ることは止めて、ドナウ川に架かる橋を歩いて渡るのも楽しい。

他方、駅前から路線バスで、ドナウ川とは反対の方向、つまり南の方に30分ほど行くと、（前記で一言した）聖フローリアン修道院がある。ここも1071年創建という古いもので、3階建てのかなり横に長い建物は、大きな学校というにふさわしい。同修道院名称由来の聖フローリアンは、消防の神様として有名である。また、同修道院はフローリアン少年合唱団の本拠地として著名であるが、何よりも音楽家、ブルックナー（Anton Bruchner）がオルガン奏者として勤めていたことで知られている。現在でも院内にブルックナーの棺を置いた特別な部屋がある。その部屋の奥の壁には6千人の頭骸骨がぎっしりと並べられ、棺を見守るものとなっている。思わず身を正される。

リンツから列車でさらに約1時間半行くと、ザルツブルク（Salzburg）に着く。その近くにザルツカンマーゲート

(Salzkammergut) もある。

V. ザルツブルクとザルツカンマーゲート

ザルツブルクは、もともと塩(Salz)の城(Burg)という意味である。ドイツとの国境にある街で、モーツアルトの生誕の地であることや“ザルツブルク音楽祭”などで、日本でもよく知られた所である。

同市の中心には、南北にザルツアッハ川が流れ、同市の市街地部分は、この川を挟んで東西に分かれた形になっている。ザルツブルク中央駅があるのは、この川の東側地域で、この地域にはミラベル(Mirabell)宮殿やモーツアルトの住んだ家(Mozarts Wohnhaus)などがある。

しかし、モーツアルトの生家(Geburtshaus)のある、この市の中心通りといわれるゲドライド通り(Getreidegasse)や、この市のシンボルといわれるホーエンザルツブルク城(Festung Hohensalzburg: 世界遺産)、大聖堂(Dom)、レジデンツ(Residenz)、ヨハネス城(Johannes Schloß)などは、川の西側にある。その中心停留所までザルツブルク中央駅から路線バスが出ている。

その中心停留所はゲドライド通りのいわば端の所にある。その近くに大聖堂やレジデンツがあり、ホーエンザルツブルク城に行くケーブルカー乗り場もある。ただし、ヨハネス城はゲドライド通りの北端にある。ゲドライド通りは、歩行者天国的なもので、賑やかな通りである。

さて、ザルツカンマーゲートは、ザルツブルクの南東にある高山や湖水が点在する地域をいい、オーストリアの代表的な景勝地である。なかんずく映画「サウンド・オブ・ミュージック」で世界的に知られるものになった。ザルツカンマーゲートとは、もともとは「塩(Salz)の御料地(Kammergut)」という意味のものである。

ザルツカンマーゲート方面にはザルツブルク中央駅からいくつかの路線バスが出ている。その1つの路線の場合、まず、ヴォルフガング湖(Wolfgangsee)を通る。近くにはアプト式登山鉄道で知られるシャフベルク山(Schafbergspitze)などがある。この路線を含め、他の路線の場合も、ほとんどすべてがバート・イシュル(Bad Ischl)駅が終点である。バート・イシュルはこの地帯の中心的都市で、鉄道の要衝駅でもある。

バート・イシュル方面にザルツブルクから列車で行く場合には、ザルツブルク中央駅からリンツ方面行き列車で、まずアトナング・プヒハイム(Attnang-Puchheim)まで行き(所要約50分)、そこで、シュタインハハ・イルドニク(Stainach-Irdning)方面行きの列車に乗り換える。この路線がバート・イシュル(アトナング・プヒハイムから所要約1時間)を通過して、さらに奥地まで(南方に向かって)行く。

ザルツブルクからバスの場合でも、バート・イシュルでこの路線の列車に乗り換え、奥地に向かい、例えばハルシュタット(Hallstatt)まで行くことができる(バート・イシュルからハルシュタットまで所要約30分)。ハルシュタットは、オーストリア随一の景勝地で、近くの山、ダッハシュタイン(Dachstein: 標高2998m)とともに、

1997年「ザルツカンマーゲート地方のハルシュタットとダッハシュタインの文化的景観」として世界遺産になっている所である。

ハルシュタットの駅は、ハルシュタット湖の東側にあり、山の急斜面に駅があるだけである。ハルシュタットの街はこの湖の西側にある。列車の到着・発車時間に合わせて、湖を渡るフェリー的な渡し舟が運行されている。

ちなみに、ハルシュタットにある納骨堂(Beinhaus)では、埋葬された人の遺骨、端的には頭蓋骨に対し、参拝にきた縁者たちはそれを手に取って対面し、表面をなでたりして、色艶を良くしたり、花の絵などを書き入れたりした慣習があったといわれる。その光景は、日本のNHKテレビ番組で放映されたことがある(この点について詳しくは大橋, 2017も見られた)。

ところで上記のように、ザルツブルクもザルツカンマーゲートも塩(岩塩)に深くかかわっており、この地方が生産地としてよく知られていたことを示している。そうした岩塩坑の典型的なものが、ハルシュタットの裏山にある。この岩塩坑は見学できる。そこに行くにはハルシュタットの街の南端に裏山に登れる登山エレベーター的なものがあるから、その終点まで乗って、山上の小道を15分ほど歩くと事務所がある。そこで見学を申し込む。見学は、ある程度の人数の者がまとまって、係の人の先導で行われる。

この岩塩坑は、この近辺の岩塩坑の中でも操業開始が最も古いものであるが、(少なくとも1997年には)現に操業中という興味深いものである。内部に(採掘でできた)大きな人工池があったり、従業員や見学者の移動用の大きな長い(階段に代わる)滑り台的な装置があったりする。そして見学者も入坑・出坑の際、坑道用レールの上を大きな丸太の形の車にまたがって進む。楽しく、かつ、印象深い。

ザルツブルクを出て、オーストリア領内経由の非幹線の列車で西方に向かう場合、車窓からいくつもの美しい山岳風景を楽しめるが、何よりもツーリズム・ポイントとなる所は、ツェル・アム・ゼー(Zell am See)である。ザルツブルクからツェル・アム・ゼーまで列車で所要約1時間40分である。

VI. ツェル・アム・ゼーとその周辺

ツェル・アム・ゼーは、“湖(See)のほとりのツェル(Zell)”という意味である。ツェラー湖の西端にある街で、この付近で顕著に見られるオーストリア・アルプス探訪の1つの基地といべき位置にある。

第1に、ツェラー湖には、対岸とを結ぶ連絡(遊覧)船があり、ツェル・アム・ゼーは湖畔ツーリズムや湖上スポーツの基地になっている。

第2に、ツェル・アム・ゼーの街のすぐ西側に、標高1965mの山、シュミッテンヘーヘ(Schmittenhöhe)がそびえており、ツェル・アム・ゼーの街から実によく見える。これは、ツェル・アム・ゼーのホーム・マウンテンといわれ、ツェル・アム・ゼーの街から路線バスとロープウェイで頂上まで容易に行け

る。頂上にはホテルや小規模の教会があり、グライダーやハンゲグライダーの基地などもある。

第3に、ツエル・アム・ゼエーから西方のクリムル (Krimml) まで郊外電車と路線バスの便があり、そこにはオーストリア随一といわれる有名な“クリムルの滝”がある。この滝は、観光客が年間約40万人もあるといわれる。滝の(全体的な)落差は約400m。ただし、その間がいくつかの小滝に分かれている連続的な滝である。主なものに“上の滝”(落差約140m)、“中の滝”(落差約100m)、“下の滝”(落差約140m)がある。

“下の滝”から“上の滝”まで、滝に沿って(ロープウェイがあるとともに)人道用の小道が作られており、多くの人は、上りか下りかの際、人道を歩いて、滝を鑑賞してゆく。頂上部分には、まことに大きな平らな自然石があり、休憩に最適な所である。近くにレストランもある。

第4に、キッツシュタインホルン (Kitzsteinhorn) へのツアーリズムがある。ここは(真夏でも)氷河の上を歩くことができるオーストリアでも代表的な個所の1つで、ツエル・アム・ゼエーから路線バスなどを使って容易に行くことができる。

まず路線バスで、近くのカプルン (Kaprun) にある「キッツシュタインホルン・氷河ロープウェイ (Gletscherbahn) の乗り場」まで行き、そこからロープウェイを、途中で一度乗り換え、最後の終点駅まで行く。そこは標高2402mで、アルピン・センターといわれる。そこですでにシュミーディング (Schmiedinger) 氷河を見ることができるが、そこからさらに頂上ロープウェイ (Gipfelbahn) があり、その終点駅(頂上駅: 標高3029m)にはレストランがある。このレストランのテラスから実際の山頂(標高3203m)をすぐ上に見ることができるが、そこまで歩いて行く登山口の案内板もある。

一方、その頂上駅からは、眼下に広がるシュミーディング氷河の上に行く氷河シャトル (Gletschershuttle) があって、氷河の中ほどの島のような所まで行き、付近の氷河の上を歩くことができる。氷河は、真夏でもかなりの厚さがあり、かつ、幅は狭いが底の深いクレバスなどもあり、迫力まことに鮮烈なものである。他方、頂上駅からは地下道があり、それを行くと「グロックナー氷河展望台」(Glocknerkanzel) がある。

第5に、ツエル・アム・ゼエーではグロスグロックナー (Grossglockner) 行きの路線バスの観光バスも出ている。グロスグロックナーは、ツエル・アム・ゼエー南方にあるホーエ・タウエル山脈にある山で標高3798m、オーストリアで最高のものである。特に1935年グロスグロックナー・アルプス山岳道路ができ、アクセスが容易になり、オーストリアで最も人気の高い山といわれる。日本でもかなり有名である。

ちなみに、Grossglocke は、ドイツ語で大きな (gross) 釣鐘、ベル (Glocke) という意味で、山の形が Glocke に似ているというものであるが、すぐそばにクライングロックナー (Kleinglockner: 小さな釣鐘: 標高3770m) もある。両者で一体をなしつつ、さらに多くの連山があり、かつその麓に大きな氷河、パステルツェ

(Pasterze) がある。かたわらに大きなホテル・レストランと駐車場があって、観光バスはそこで数時間駐車する。観光バス旅客はレストランで昼食をとり、氷河で心ゆくまで楽しめる。

ツエル・アム・ゼエーについては以上とし、ツエル・アム・ゼエーからオーストリア国内を西方向に向かい、ヴェルグルを経て、列車で約2時間行くと、チロル地方の中心都市、インスブルック (Innsbruck) に着く。

VII. インスブルックとその周辺

インスブルックは、もともとはイン (Inn) 川に架かる橋 (Brücke) という意味である。世界的には1964年と1976年に冬季オリンピックが開催された所として知られ、市内にその際使われたジャンプ台などがある。

インスブルックの中央駅は、市の中心部の近くにある。市の中心通りには、まず凱旋門があり、その奥に、この市のシンボルといわれる「黄金の小屋根」(Goldeness Dachl) がある。これはもともと神聖ローマ帝国皇帝マキシミアン一世が、その前庭の中央広場で行われる祭りなどを観覧するために作らせたもので、そのバルコニーの屋根に2657枚の金箔が貼りつけられているものである。その横に王宮がある。

インスブルックの北側には、カールヴェンデル (Karwendel) といわれる高山の山脈が連なり、その威容は人々を圧する。その中でインスブルック市内から容易に行くことのできるものにハーフェルカー (Hafelkar) という地点がある。市内中心部からケーブルカーでまずフンゲブルク (Hungerburg) まで行き、そこからロープウェイを乗り継いで、終点ハーフェルカー (標高2334m) まで行く。そこに展望台がある。

他方、市の北西方、ドイツとの国境にはツーク・シュピッツェ (Zug Spitze: 標高2962m) がある。これはいわばドイツと共有的なもので、オーストリア側登山口もあるが、一般的にはドイツ領内のガルミッシュ=パルテンキルヘン (Garmisch=Partenkirchen: インスブルックから列車で所要約1時間20分) から行くのが便利。ガルミッシュ=パルテンキルヘン駅近くに登山電車乗り場があり、登山電車、ロープウェイを利用して山頂まで行ける。登山電車の終点である9合目にも、(そこからロープウェイで行ける) 山頂にもレストランがある(この点について詳しくは大橋, 2020を見られたい)。

一方、インスブルックからさらに西方行き幹線鉄道路線を列車で30分ほど行くと、オェッツタール (Ötztal) に着く。ここはオェッツタール・アルプス (Ötztaler Alpen) の玄関口で、オェッツタール・アルプス中の奥地のオーバーグルグル (Oberurgl) まで路線バスが走っている。例えばその終点間際にゾェルデン (Sölden) がある。ここは、世界的に名高いスキーマッカといふべき所で、3000m級の山岳にロープウェイやリフトが数多く設置されている。主たるロープウェイは夏でも動いている。バス終点のオーバーグルグルはチロルに典型的な村落である。

Ⅷ. おわりにあたり

以上で紹介したオーストリアのツーリズム事情では、スイスなどと同様、高山の多くあることが何よりも特徴的である。その中の多くの所では、まず登山用交通路として、道路はもとよりケーブルカー、ロープウェイ、リフトなどが完備され、頂上のな所まで比較的容易に行けるようになっており、かつ、頂上のな所では本格的なレストランなどが設置されている。

それ故、ごく通常の人でも、通常的な服装や所持品のままで、しかも昼食などの携帯もなしで、3000m 級高山のかなり高い地点まで容易に行くことができる。これこそは、まさにツーリズム王国の姿であり、こうしたことの実現に努めてきた先人たちの努力の賜物である。もとよりこれは、換言すれば、これまでにおける近代化、現代化の成果であるが、しかし他方において、こうしたことが今日あるいは今後においても同様に進められうるものかどうかについては、大いに議論のあるところである。

そこで、ここにおいて、オーストリアの人々の考え方的一端をうかがうために、筆者がオーストリアを訪問した際に経験した“木製のエスカレーター”を紹介しておきたい。これは、エスカレーターの踏板や周りの板などが（鉄板ではなく）木の板などでできているものである。作動の基本的部分はもとより機械的なもので、鉄製であったと思われるが、そのカバー部分などはすべて木製のものであった。少なくとも外観的には“木製のエスカレーター”といていいものであった。

こうした鉄製部分と木製部分との共存的合作的な物は、今日では、木造家屋や木造船隻など実に多くの物でみられるが、エスカレーターについてこうした木製の物があることは、日本では聞いたことすらないものである。ここには、山国といえる、従って木材生産が盛んなオーストリアの人々の自然の適正利用の精神が、象徴的に現われていたように思われる。

〔付記〕 本稿は、1997年に調査研究のためにオーストリアを訪れた時の見聞に基づくものを含んでいる。本稿記述に際しては他の資料等により充分補完しているが、現在の状況についてはインターネット等で確認されたい。

〔参考文献〕

- Wikipedia: the Free Encyclopedia, 「World Heritagesites」, 「Austria」, 「Wien」, 「Schoenbrunn」, 「Marie Antoinette」, 「Universität Wien」, 「Radetzky」, 「Wiener Prater」, 「Salzkammergut」, 「Hallstatt」, 「Zell am See」, 「Grossglockner」, 「Kitzsteinhorn」, 「Krimml Waterfall」, 「Goldness Dachl」 etc., retrieved on December 1, 2022.
- 大橋昭一 (2017) 「ヨーロッパの『カタコンベ』など—死者の扱われ方: 東は東、西は西—」『和歌山大学・観光学』16号 (観光フォーラム)、79-82頁
- (2020) 「ヨーロッパのツーリズム事情—基礎的な事柄—」『和歌山大学・観光学』22号 (観光フォーラム)、109-114頁

受理日 2023年5月15日